

大学における地理学教育の実践報告

山 野 明 男

はじめに

名古屋市立高校の教員を19年、愛知学院に勤めて19年、高校教員と大学教員の勤務年数がちょうど同じ年になった時を踏まえ、この大学においてのこれまでの地理学教育を振り返りたい。大学で10年を経過した時、「大学の教養教育における地理学の指導方法」（愛知学院大学短期大学部研究紀要12）の中で、教養課程の地理学教育については言及しているので、今回は愛知学院大学における教職課程の地理学分野を紹介しながら地理学教育の反省をしたい。現在、教職課程で担当している科目は、「地理歴史科教育法Ⅱ（地理分野）」、「地理学A・B」、「自然地理学Ⅰ・Ⅱ」、「地誌」である。

これらの教職課程の受講生は、高等学校の地理歴史科の教員免許を目指す文学部歴史学科を主体に、宗教学科と法学部現代社会法学科の学生である。また、中学校の社会の教員免許を目指す上記学科の学生以外に、法学部法律学科、総合政策学部総合政策学科、そして心身科学部心理学科の学生もこの中の「地理学A・B」と「地誌」を受講する。

地理学関係の専任教員が愛知学院大学において筆者1名のため、教養部における教養基礎科目の地理学と教職課程の地理学を掛け持ちで、一部は歴史学科や総合政策学部の選択専門科目もそれらと合併で授業を実施している。これらの授業内容の構成はその専門性も重視しているが、教員養成にも対応できるよう指導している。

そこで、教職課程用開講科目における筆者の地理教育実践内容を紹介し、その中で地理のおかれた位置、地理学習の指導法、教員採用のための地理の補習についても言及したい。

1 高等学校学習指導要領における地理の位置

最初に、教職課程に関わる地理の位置について、高等学校の学習指導要領でとらえておく。このところ高等学校学習指導要領の改訂の度に、地理の肩身が狭くなっている。

高等学校において、人文地理から地理に変わった昭和35年公示（昭和38年度施行）の改訂は、地理にとって最も恵まれた環境であった。この指導要領では、全国の高校生全員が地理を履修するという画期的なものであった。そのため、この時期は地理の教員も多く採用され、高校の現場では巡検と称する現地研修も積極的に実施された。この改訂は進学率の上昇に合わせて世界史・地理をA・Bに分けて、Aを偏りのないゼネラルな内容に、Bは進学主体のアカデミックな内容とした。

ところが、それ以降の改訂では地理が選択科目になり、地理の履修者数が減少するような学習指導要領となっていった。それと共に地理での大学受験者も減少し、大学でも地理の入試が敬遠された。これは大学に地理学の専門家が少なかったことも原因としてあげられる。受験の機会の少ない地理に対して高校でも地理選択が減っていった。

そのため、例えばある県の県立高校では、1970年代からの多くの新設校を設立するにあたって、受験対応のできない地理をカリキュラムから外し、教員採用においては履修者の少ない地理の教員は激減し、世界史と日本史の教師で占められ地理の指導がなされない形態も出現した。

また、平成元年の学習指導要領の改訂では、社会科が解体され地理歴史科が新しく生まれ、世界史が必修となり地理の履修人口の減少が危惧された。最近の傾向として、世界史とともに各県が独自に日本史も必修にしようとする動きも出てきた。このため地理歴史科では、世界史と日本史が必修となり、地理が未履修で卒業するところも多く、この形が定着する恐れが多分にある。一方、大学センター試験では、地理歴史科内の受験者数は日本史Bに次いで地理Bが多いという矛盾を生じている。

これらの学習指導要領における教育課程の地理の変遷については、大学の地理歴史科教育法の講義において、筋道を追って解説している。これら講義の中で地理の科目の重要性を力説しているが、現在のカリキュラムから多くの高校生が地理を選択できない状況について受講学生に質問すると、二通りの答えが返ってくる。

一つの答えは、地理は必要ないという意見である。また地理を教える機会がないので、教職履修者たちはもう地理を学習しなくても地理歴史科教員としてやっていけるのではないかという。この答えは当然かもしれない。

もう一つの答えは、地理的視野をもっていないと空間理解ができないので、ぜひ地理を学ぶ

機会をもつべきだという意見である。これは、高校の世界史専攻の教師も同じことを言う。なぜなら、外国の位置や地名を知らずに世界史を展開しても地理的位置を把握しないと理解ができない点を挙げる。

このようにみえてくると、地理の社会的地位を向上しないと地理選択者がじり貧状態になることも考えられる。この結果、ほとんどの学生が高校で地理を学ばずに、大学で詰め込まれる地理学関係科目の履修のみで地理歴史科の教員に、また中学校社会科の教員になっていくのが実情である。これは非常に由々しきことである。こうした問題点を踏まえ、将来の地理の教師を目指す学生たちに対して、筆者が実践している地理学での指導法を次に紹介する。

2 地理学開講科目の実践内容

(1) 全体の科目構成

教職用に地理学関係の各科目を受講するにあたって、地理学全般が履修できるように科目内容を組んでいる。そこで、どのような展開で進めているかを紹介する。

自然地理学Ⅰ・Ⅱは、自然地理学の基礎と題して、自然地理学Ⅰでは地形を、自然地理学Ⅱでは気候・植生・土壌・水文を取り扱い自然地理学のすべてを網羅している。

地理学A・Bは自然・人文地理学と日本地誌を取り込んで自作の教科書を使用し、日本各地の地理的事象を地形図の判読から行っている。地理学Aは自然地理学的に地形から人間生活の土地利用を捉え、地理学Bでは人文地理学的に人間のつくりだした村落や都市の様子を地形図から捉えている。

地誌は、世界のすべてを知ることが必要であると思い、アジアやヨーロッパなど州単位にポイントを押さえ世界各地の状況を知らしめるべく、映像や各種資料を提示することによって理解を深めている。

地理歴史科教育法Ⅱ（地理の分野）では、地理の教師として教壇に立てるよう地理独自の指導法を伝授している。

このようにみえてくると、教職課程の履修者にとっては、世界地理を地誌で、日本地理を地理学A・Bで、自然地理を自然地理学Ⅰ・Ⅱや地理学Aで、人文地理学を地理学Bで賄っているが、これに教養の科目の地理学Ⅰ・Ⅱを受講すれば、すべてを網羅できるように設定している。

しかし、履修してほしい教養の地理学Ⅰ・Ⅱは歴史学科の学生は受講できない設定となっている。地理学Ⅰ・Ⅱを地理歴史科の教職課程受講者で受講できるのは、法学部の現代社会法学科と文学部の宗教学科の学生である。もし、検討する余地があるとすれば地理学A・Bの内容

構成を思い切って人文地理学とすべきかと考えている。

なお、筆者が教養教育で担当している教養セミナーⅠ・Ⅱは、今注目の「防災」を取り上げているので、これも履修するとより良いものとなる。筆者の開講している講義をすべて履修できるのは、法学部の現代社会法学科の教職課程履修の学生である。教養セミナー以外のすべての筆者の科目を履修した学生も今までに数人見受けられる。

(2) 各科目の構成と実践

① **自然地理学Ⅰ・Ⅱ** 自然地理学は、文系の学生にとって最も不得意とする科目である。高校で地理も地学もほとんど未履修の学生が、プレートテクトニクスや第四紀の地形・水文学といわれても理解するのは容易でない。これらを学習するため、地形学、気候学、植生地理学、土壌学、水文学の基礎と題して、生成のメカニズムを中心に解説している。例えば、地震や火山活動、大気の大循環などのメカニズムを解説し、生成の原因を理解させることに重点を置いている。

今までいくつかの市販の教科書を使用したのが、筆者の授業目的（すべての項目を教える）に合致するものはなかった。例えば、最初に使用した杉谷・平井・松本著『風景のなかの自然地理』は、地形学が中心で植生・気候が少し入っている状態で、自然地理学全般を指導するのにもの足りないものであった。次に使用したのが、大山・大矢著『大学テキスト自然地理学 上巻』古今書院刊は、下巻もあり両方揃えると高価につき、上巻だけ買わせて授業に使用した。これも、両者とも土壌や植生が触れてなく片手落ちであった。

そこで、筆者は自分なりの図面を集めた資料集を作成しようと努力した。問題なのは各所から集めた自然地理学の資料は現在カラー刷りが多く、費用を安く上げようとする、モノクロの図面が少ないことが分かった。そのような中で作成したのが、山野明男編『自然地理学の基礎』と題する資料集で、ノートも組み込んだ形をとって、板書の内容がその項目の後のページに書き込めるように工夫している。

講義の内容としての問題点は、地理学Aの自然地理学的部分の小地形の部分と重複することである。自然地理学Ⅰではその部分を簡略化して解説している。

② **地理学A・B** この教材は、教養の「地理学Ⅰ・Ⅱ」の地形図の読図と作業と同じ内容の授業展開をしていたが、2年前から独立してこの授業のみで行うこととなった。テキストは『コンターから見た日本の姿』を自作編集した。このはしがきには次のような文章を載せている。

「このテキストは、地形図を通して特色ある地理的事象を取り上げながら、それぞれの地域を理解しようとしたものである。地形図が読み取れるようになると、地形図を見るのが楽しく

なる。この冊子で、日本各地の見過ごされた多くの地理的事象を読み取っていただきたい。なお、コンターとは等高線を意味している。本書はまず、Iでは地形図の読図の基本となる空中写真、IIでは地形図の見方・読み方を解説している。そして、IIIでは自然地理的視点から地形に焦点を当て、IVでは人文地理的視点からそこで繰り広げられる人間活動を追究した。テーマ・地域は、それぞれの代表的事象としてよく取り上げられているものを精選し、テーマ・地域の姿・設問と作業・資料・ノートの順に1項目4頁で配置している。」

再版の際、テキストはこの教職（専門）での講義に限られるので、資料とノートの頁を追加した。

この教材は、基本的な読図の知識を身に付けさせるのが目的である。特に、設問と作業を義務付け、地図の持つ三次元を体感できるように比高を求めたり、断面図を描かせたり、地形図に刻まれた歴史を追うなど、そして作業では土地利用を彩色することを中心にして、彩色で何が読み取れるか、また何が卓越しているか、どのような工夫が認められるかを文章にするなど、学生の読図能力の向上に効果をあげていると思われる。

しかし、先にも述べたが地理学Aで自然地理学Iとの一部重複、人文地理学が系統立てて説明できないことなど反省材料は多く認められる。自然地理学が存在するので、この地理学A・Bを人文地理学に特化して考える必要がある。

しかし、学生の反応は地理的知識が身に付く、彩色作業による読図は興味がもてたなどの感想が寄せられる。

③ **地誌** かつては、愛知学院に赴任1年目は、日本に焦点を当て、P.シェラー著『西ドイツ地理学者のみた日本』をテキストにして日本全体の地誌を教えた。その後、他大学の非常勤の教職の地誌では、筆者が現地調査しレポートのあるネパールやインドネシアの地誌を教えた。愛知学院大学では1年後専任でみえた白井義彦教授が長年地誌を担当されていたので、白井先生の定年退職に伴って再び地誌を教えることとなった。その際は、最初から教職に役立つための地誌が必要と思い、半期であるが思い切ってサブタイトルを「世界地誌（世界を巡る）」として世界全体を学習することとした。

講義概要では、「世界地誌と題して全世界を対象に、講義と視聴覚を用いて地域ごとに紹介する。世界各地の様相について映像を通して理解を深め、世界を駆け足で巡り基礎知識を得られるように努める」と紹介している。そのために高校で教科書に指定されている地図帳を利用する。

そして、教材として筆者の作成した「世界地誌」という講義ノートを使用している。これは問答形式で、予習して答えを書き込めるようにしている。学生は地図帳を用いたり、インターネットを利用すれば予習できるものとしている。

受講生は、短期間であるが世界各地の地理的事象を学ぶことができ、予習し答え合わせを授業で行うので教員採用試験などにも役立つと思われる。DVD、ビデオテープやCDを購入して各地の映像を見せているが、作成時から時間が経過するため、教材として問題が多い。世界各地の現況について最新の映像の入手が望まれる。一部地域は、報道番組を利用することもある。

④ **地理歴史科教育法Ⅱ（地理分野）** この授業では、長年高校の教壇に立ってきた経験を活かし、実際に役立つ地理の指導法を講義している。まず、地理教育の抱えた問題点を指摘する。そして、これまでの学習指導要領の変遷における地理の扱いを紹介する。次に、新学習指導要領に基づく高等学校の「地理A」と「地理B」の内容を検討する。また、地理の専門知識の把握とともに、地理の見方や考え方、地理学習の指導法などの演習を行う。その後、高校現場で地理の授業ができるよう模擬授業も積極的に取り入れている。地理歴史科教員として自立できるよう指導したいと講義概要でも謳っている。

最初に、藤田佳久の「地理教育の視点」を読んで解説している。この内容は、現代の地理教育の抱えた問題点を浮き彫りにしていてその対応策を示している。例えば、地理に興味のない教師に教えられると地理嫌いが再生産されること、興味のない授業展開をするのであれば図書館で自習させた方がましであるなどと、現状の地理教育をうまく捉えている。

次に、学習指導要領における地理の位置づけを説明し、現在の指導要領の内容を解説する。そして、次に示す地理学習の指導法を演習形式で行う。

模擬授業は、早くに指導案の書き方を示しておき、最後の4時間で代表者によって実施している。学習指導案は受講者全員に作成を課し提出させる。

この模擬授業に積極的に実践しようという学生が年々減少している。歴史学専攻生が中心のため、地理には自信がない、高校で受けていないから等の理由をあげる。模擬授業では他の学生が生徒の役割をする。自主的に実践に名乗りを上げる学生は、自信と教師観をもっている。授業後の反省会では、活発な意見が出ていて鋭い指摘があるが、いざ自分が教壇に立つという事は積極的でない。

教職課程の履修者に対してはどのような講義が求められているのか。その責任はどうすれば果たすことができるのか。常に心にとめることが大切であると痛感する。

3 地理学習の指導法

興味を抱かせるための地理独自の指導法は、次のような内容を演習形式で行っている。最初に地球の理解、次に時差の計算、メンタルマップの作図、シミュレーション教材の利用の4項

目から構成している。

(1) 地球の理解

地球の理解では、まず「三球儀」を用いて太陽と地球との関係、そして月と地球の関係、三者の構成などを示す（写真1）。そして、地球が太陽の周りを1年かけて回っていることをこの模型で示す。その際、地球が23.5度傾いたまま移動するために季節のあることを実感させる。太陽に電球がセットしてあるため、教室を真っ暗にして地球の昼夜の関係や太陽の当たる場所の変化などを観察させる。

太陽の下に円盤がありそこに月と上・中・下旬が示されており位置を確認することができる。

次に、比較的大きな地球儀を用い、球体（正確には回転楕円体）であることを認識させる（写真2）。具体的には距離や方位を確かめさせ、地図の投影法いわゆる図法の使用には問題が多いことが理解できる。小中学校の教室に掲示されているメルカトル図法の世界図は、面積や距離、方位が正確でないことが実体験できる。メルカトル図法は、航海にあたって正確に目的地に着けるように工夫した海図である。

地球儀で地球の観察を行うと世界の見方が変わってくる。地図はその目的に応じて使用しなければ、基礎的な過ちを犯すことになる。いまだに、アメリカ合衆国は東に位置しているとか、イギリスは西に位置しているとらえる学生がいるので、地球儀の演習は重要な役割を果たしている。



写真1 三球儀（太陽・地球・月）による指導



写真2 地球儀（23.5°傾きに注目）

(2) 空中写真の立体視

この立体視は実際には地理学Aの最初に取り入れている。というのも、地形図の作製が現在空中写真を材料にしているからである。空中写真を立体視させることによって地図が容易に作製できることを理解させる目的である。3Dの映像が多く出回る時代なので原理的には掴めるようである。この結果、現地の測量を10年以上かけて行う地図作製が簡単に机上での立体視で行えるようになったことを理解させている(写真3)。

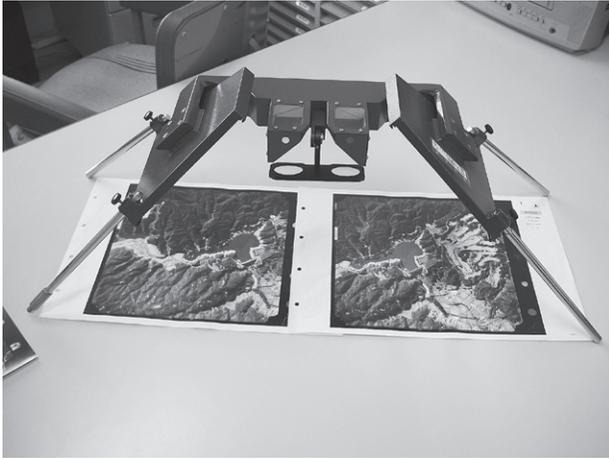


写真3 実体鏡による空中写真の判読(立体視)

製できることを理解させる目的である。3Dの映像が多く出回る時代なので原理的には掴めるようである。この結果、現地の測量を10年以上かけて行う地図作製が簡単に机上での立体視で行えるようになったことを理解させている(写真3)。

(3) 時差の理解

地球が理解できると、次は時差の問題に取り掛かる。これは先の三球議で昼夜の関係を観察している

るので頭では理解できても、実際の計算は容易ではない。まず、赤道で地球を輪切りして、縦の経線がどのように配列されているかを示す。イギリスのロンドン旧グリニッジ天文台を通る線を0度(世界標準時)として、東に180度、西に180度に分けられ、その180度を日付変更線にしている。この日付変更線の存在がなかなか理解できない。この線を東から西に通過する場合は1日プラスする、一方西から東に通過する場合は1日マイナスする、というものである。

世界の標準時がロンドンの旧グリニッジ天文台であるので、そこを基準に考えればよい。日本は兵庫県の明石市が東経135度の位置にあり日本の標準時としている。地球を一周すると360度であり一日24時間で一周するので、1時間で15度の時差が出現する。ロンドンと日本では135度の間隔で9時間の時差が生じていることが分かる。地球は東へ回っている所以日本の方が9時間先の時間であることが分かる。先の日付変更線を通る場合とか、航空機で移動する場合の問題になると誤答が多くなる。

筆者はかつて時差の教材開発を行ったことがある。薄い板で直径28cmと21cmの2枚の円盤を作成し大きい方を基盤にして時刻の目盛を入れ、小さい盤に北極中心の北半球の地図を入れ円の端に経度を記入した。これを重ねて中心をボルトとナットで止め小さい円盤が回転できるようにした(写真4)。これは教材として利用価値があると思ひ、教科書会社に持ち込んで

検討してもらったが、採用までには至らなかった。しかし、しばらくして同じ原理の小型版がプラスチックの薄いもので市場に出回った。今でもこの盤は時差を説明するのに使っている。

(4) メンタルマップ

メンタルマップとは記憶地図と訳される。頭の中に描かれる地図のことであり、地域をどの程度把握しているかを知る指標になる。ルートマップ、世界地図、日本地図の作成の例を示す。



写真4 時差を表す自作の教材

① ルートマップの作成 地図の作成では一番

身近な問題を出す。学校から自宅までの紹介地図を描かせる。これは生活に必要なと思われるからである。カーナビゲーションが発達したが、ちょっと手書きの地図が描ければ便利だと思い、この課題を実践し、最後に何が必要かその描き方を教える。自分で地図を描くことに慣れていない学生は戸惑いを見せる。道路マップなどを見慣れている学生は容易に描くが、距離感もないため十分な地図が描けない。学生によるルートマップ作製は不十分で、一旦集めた地図にコメントを書き込む。自宅の近くをより詳しく書くこと、主要な曲がり角には地名を入れることなどである。

その後、授業で各自の描いた地図を返し全体的な説明をする。こちらで交差点名など入れておくと、教師がなぜ自分の家の近くのことを知っているのかと不思議がる。それは、筆者が必死に学生の書いた地図をロードマップで後追いでできるか確認しているためである。

最後に諸注意をする。この紹介地図は、徒歩か車かそれとも公共交通機関かを明確にすること、それによって描き方が異なることを示す。地図の中で方位を途中で変更すると捉えにくくなること、また進む方向によって見えるものが違うこと、そのため学校から自宅までの地図と自宅から学校までの地図は、当然異なることなどを教えている。

② 世界地図の作成 これは「メンタルマップからみた大学生の世界認識」(1998)にまとめているので省略する。この地図作成により学生の世界認識の一つの指標が得られる。

③ 日本地図の作成 世界地図同様、A4の用紙に日本地図の輪郭と該当場所に都道府県名を書き入れよという課題である。日本の輪郭に関心を持って地図を見ていなければ、突き出た半島が抜けていたり、湾の記入がなかったりと日本の理解度がよくわかる作業である。知らない土地ほど輪郭が不明確となる。特に入り組んだ九州の長崎県などは困難だと思われる。

都道府県名は47のうち平均で約40と高いデータが示されるが、受講者が地理歴史科の教員志望では不十分と言わざるを得ない。東北が苦手であったが今回の震災（2011.3.11）で理解が深まったのは明らかである。なかでも北関東（群馬・栃木・茨城）、中国（鳥取・島根）、四国（香川・徳島・愛媛）、九州（大分・佐賀）の把握は不十分と言わざるを得ない。漢字で表記できない学生もいる。これに都道府県庁の所在地を求めるとさらによくはない結果になるであろう。天気予報の時間などを毎日見ている、意識して見ていないとこのような結果が出てくると思われる。

これらのメンタルマップの作業を年間授業の最初と最後に取り上げれば、どの程度理解が進んだかが読み取れる。

(5) シミュレーション教材の利用

シミュレーションとは、疑似体験と訳される。教室では講義を聴くだけでは退屈するので、変化に富み児童・生徒の関心と呼ぶため疑似体験を導入すると有効である。そのための教材がいくつか開発され、現在ではコンピュータで操作しながら疑似体験できるものまである。ゲーム感覚でできるので関心もたれている。

① **小学の例** 六角英彰「小4「地域の開発」単元におけるシミュレーションゲームの開発」を紹介している。作成者の勤務校において地域の様子を歴史的に解明し、碧海台地という洪積台地末端の吉浜村（現高浜市）での幕末時代を再現し、当時の農民の生活をゲームにした。土地条件の異なった耕地に作物を選定し、その年の天候をサイコロで出し、収穫量が決定するというものである。児童にとっては現在自分の住んでいる土地であり、過去の生活に興味をもち単元の趣旨に合った教材と思われ学生に紹介している。

② **中学の例** 山口幸男「北海道鉄道建設ゲーム」を紹介している。

このゲームは「あなたが北海道開発長官になったつもりで、北海道全体の中心都市「札幌」から、北海道東部の中心都市「釧路」までの鉄道を、できるだけ安い費用で建設していくものである。時代は北海道の幹線鉄道が建設される明治・大正期として、地図中に鉄道線路を書き入れる。」地図中の六角形（ヘクス）の中に書いてある数値（ポイント）は、そのヘクスにおいて鉄道を建設するのに必要な費用を著している。数値の大小は、地形（高度）に基づいて決めている。これも現在のルートとほぼ同じになるので、作成してから地図帳を開いてみると回答が得られるという優れたものである。

③ **高校の例** これは、川合元彦「城下町の成り立ち」（『生活の場の見方・考え方—地理教育演習—』）というシミュレーション教材である。最初に城下町の歴史を授業で解説し、その後、ある都市を等高線で地形を表し、河川や湿地などを示す程度の地図の中に5か所の候補をあ

げ、この中から城下町の所在地を選定して、そこを中心に城下町を自分で描くというものである。

よって、城とか堀、武家屋敷、町人町、寺町などを自分で描くというものである。実際は静岡のまちを例にしているが、現在の駿府城でなくてもそれなりの理由づけで城下町を描けばいいものである。受講学生は歴史の学生が多いので、このシミュレーション教材には大変興味をもつ。

このように、講義一辺倒ではなく演習形式のシミュレーションを取り入れることは、授業に幅をもたせ興味をもたせるのに役立つと思われる。これらの教材は、一部コンピュータに取り入れられゲーム感覚で実施できるものもある。これらを積極的に取り入れることをお勧めする。

このように地理独自の指導法があり、これの実践に努めてきた。これらの教材には、教師になつたらぜひ取り入れようと意気込む学生もあれば、現在家庭教師をしているので早速取り入れてみるという学生もいて、こちらが実習していて楽しくなる。

4 教員採用と地理の補習

教職課程履修者は、教員免許状を取得するのが目的であるが、その先に教員採用試験が待ち構えている。受講生の中には、教員免許状のみを取得するのが目的と思われる学生も存在する。しかし、ほとんどの学生は教員採用試験に合格し、教壇に立つことを夢見ている。その目的をできるだけ達成して欲しいと願い、筆者の専門である地理関係の科目補習を展開している。

教員採用試験の愛知学院大学現役合格率は、高等学校の地理歴史科や中学の社会は芳しくない(表-1)。この傾向は、受験者の分母が多く競争率が高いこと、もう一つには現役中心の

表-1 愛知学院大学における教員採用試験合格者数(地理歴史・中学社会)

| 年度 | 延べ人数 | | | | | | |
|----------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 |
| 新卒者計 | 2 | 5 | 8 | 5 | 8 | 5 | 13 |
| (うち地理歴史) | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| (うち中学社会) | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| 既卒者計 | 11 | 5 | 18 | 45 | 36 | 40 | 38 |
| (うち地理歴史) | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 5 | 1 |
| (うち中学社会) | 1 | 0 | 4 | 2 | 2 | 2 | 4 |
| 全体合計 | 13 | 10 | 26 | 50 | 44 | 45 | 51 |

※2005年～2007年は報告者のみの数値、2008年～2010年は地元東海4県教育委員会・3政令指定都市に確認した数値、2011年は全国の各教育委員会に問い合わせ回答のあった数値
教務課把握分2012年4月現在

採用であるが、数年間講師の経験を経て採用される傾向が強くなったこともある。表においても既卒者の数が増加していることが読み取れる。愛知学院大学全体でここ数年、既卒者と新卒者を合わせて約48人の正規教員の合格であるが、地理歴史・中学校社会を合わせ平均4名というのが現状である。よって採用が決まらなかった学生の多くは、講師（常勤・非常勤）を希望する。その講師枠に入ることが希望学生にとって重要な課題となっている。

そこで、採用試験の合格者を増やす手立てとして、受講生の教職能力を高めていくことが必須のことと思われる。地理歴史科といっても愛知学院大学には地理学科がなく歴史学科が中心の学生は、一般に地理関係が不得意なので何とかレベルアップを図ろうと、地理歴史科教育法Ⅱの受講生を中心に希望者を集め、正規の時間外に補習を実施している。

補習は、毎年2月下旬の5日間に採用試験対策講座（地理）と称し、この近辺の愛知県・名古屋市・岐阜県・三重県・静岡県の5県市の前年夏に実施された教員採用試験問題の地理の部分を抜き出し冊子にし、1か月前に配布して予習できるようにし、補習時間内にその解説を行っている。

最初受講生は5・6人と少なかったが、最近は約30人となっている。教務課教職係にも冊子の作成や受講者募集に協力いただいている。採用試験問題は、5県市ともなると、こちらの予習も時間がかかることになる。なぜなら、解答を導くためすべて裏付けをとり、統計などを確認する必要があるためである。しかし、筆者が過去高校において大学受験の指導、採用試験問題などの問題作成に携わった経験に助けられている。

長年、教員採用試験の問題を検討してくると、各県の傾向が分かる。採用試験問題には、正当な問題、重箱の隅をつつくような問題、さらには問題視されるものまである。

学生からこの補習が採用試験に役立ったという声を聴くと、例えば高校の退職教員などを講師に他科目への拡大を望む。

おわりに

この報告では、地理の置かれた位置、地理教育のなかの教職課程の実践内容の紹介、その中で特に重要と思われる地理学習の指導法、教員採用と地理の補習について言及した。

高等学校の学習指導要領の変遷をみても、地理の社会的地位を向上しないとじり貧状態になることも考えられる。ほとんどの学生が高校で地理を学ばずに、大学で詰め込まれる地理学関係科目により地理歴史科の教員に、また中学校社会科の教員になっていくのが実情である。この結果、地理嫌いの学生の再生産に繋がることが予測される。

現在、教職課程で担当している科目は、「地理歴史科教育法Ⅱ（地理分野）」、「地理学A・

B)、「自然地理学Ⅰ・Ⅱ」、「地誌」である。筆者は教職課程の履修者に対し、各科目を網羅的に教えることが重要であると判断している。半期の科目なのでもう少し時間が取れば、より緻密な指導ができると考える。また、人文地理学を系統的に実施できることを考えたい。学生の地理への興味と理解を深め、将来の地理教師育成の一助になればと切望する。今後は提起した問題点の改良に努めたい。

参考文献

- 大山・大矢 (2004)：『大学テキスト自然地理学 上巻』古今書院 123p.
- 川合元彦 (1986)：「城下町の成り立ち」『生活の場の見方・考え方—地理教育演習—』古今書院 40-49.
- 杉谷・平井・松本 (1993)：『風景のなかの自然地理』古今書院 140p.
- 藤田佳久 (1993)：「地理教育の視点」都築亨編著『地理歴史科教育を考える』杉山書店 117-128.
- 山口幸男 (1999)：「北海道鉄道建設けゲーム」『新シミュレーション教材の開発と実践—地理学習の新しい試み—』古今書院 101-108.
- 山野明男 (2004)：「大学の教養教育における地理学の指導方法」『愛知学院大学短期大学部研究紀要』第12号 146-158.
- 山野明男 (1998)：「メンタルマップからみた大学生の世界認識」『愛知学院短期大学研究紀要』第6号 84-101.
- 山野明男編 (2009)：『自然地理学の基礎』（資料集・ノート）あるむ 64p.
- 山野明男編 (2009)：『コンターから見た日本の姿』あるむ 118p.
- 山野明男編 (2010)：「世界地誌」講義ノート 19p.
- 六角英彰 (1997)：「小4 「地域の開発」 単元におけるシミュレーションゲームの開発」愛知教育大学地理学報告85 10-27.
- P. シェラー 浮田典良訳 (1980)：『西ドイツ地理学者のみた日本』地人書房 203p.